

E TV特集

「スーパー能 650年目の挑戦」(仮)

<放送> 6月15日(土) Eテレ 後11:00~11:59



(スーパー能・世阿弥の一場面)

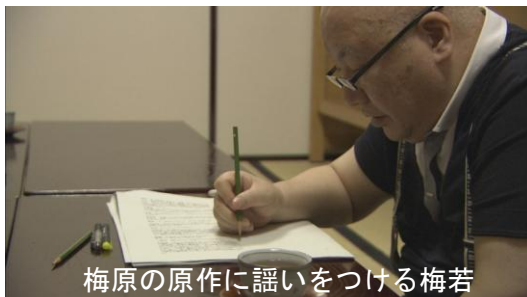
2013年4月、能の大成者・世阿弥の生誕650年を記念して、新作能が発表された。スーパー能「世阿弥」。全編現代語・照明効果の導入・多様な登場人物が織りなすセリフ劇など、能の常識を覆す様々な演出がほどこされた能舞台である。原作は、かつて「スーパー歌舞伎」の原作を手がけた哲学者・梅原猛(88)。演出と主演(シテ)は、当代一流の能楽師・梅若玄祥(65)。今こそ日本人が能にふれて欲しいと願う梅原と、新時代の能のあり方を模索し続ける梅若。「現代人も楽しめる能舞台」を目指した二人の男の1年を追った。能とは何か・・・その答えの一片がそこから見えてくる。

能は、室町時代に観阿弥・世阿弥親子によって芸術の域に高められた。以来600年余、観世親子が大成した能の基本形式は大きくは変わっていない。しかし、能は「言葉が難しい」ために、現代人には馴染めないものとなっている。新作能の依頼を受けて梅原猛が最初に考えたのが、現代語で能のセリフを書くことだった。

梅原は能、特に世阿弥の作品には「自然との共生」という日本人にとって大切な精神が貫かれていることを指摘する。原発事故で明らかになった「人間中心の文明」の限界。今こそ「自然との共生」という精神を見直すべきだ・・・長年の研究テーマである世阿弥を題材に、梅原は新作能の原作作りに取り組んだ。カメラは梅原の口述筆記の現場に入り、世阿弥に取り憑かれたかのようにセリフを紡ぐ創作の瞬間を捉えている。



苦悶する世阿弥のセリフを語る梅原



梅原の原作に謔をつける梅若

能楽師・梅若玄祥にとって、今回の演出は未知の体験であった。能の形式を無視したかのような自由奔放な梅原の台本。能独特の抑揚やリズムになじみにくい現代語。新しい試みに挑戦しながらも、作品から「能らしさ」を失うまいと、梅若は関係スタッフとともに試行錯誤を繰り返した。原作の校正、出演者や囃子方とのリハーサル、4月の初演・・・一つの能舞台が出来上がるまでの一部始終と、創作者たちの苦闘の1年をカメラは追った。

【出演】梅原 猛(うめはら たけし 哲学者) 梅若玄祥(うめわか げんしょう 能楽師)ほか

スーパー能「世阿弥」世阿弥生誕650年を記念し、国立能楽堂が梅原猛に原作を委嘱、梅若玄祥に演出を依頼。2013年4月19日、国立能楽堂での初演を皮切りに、9月まで愛知・大阪等各地で公演が行われる。